

平成 22 年 6 月 3 日現在

---

---

研究種目：特定領域研究
研究期間：2005～2009
課題番号：17083029
研究課題名（和文）「東アジアの海域交流と日本の伝統文化の形成」調整班 A01：文献資料研究部門
研究課題名（英文）Maritime Cross-cultural Exchange in East Asia and the Formation of Japanese Traditional Culture: A01 Coordinating Group of Philological Research Section
研究代表者 平田 茂樹 (HIRATA SHIGEKI) 大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授 研究者番号：90228784

---

---

## 研究成果の概要（和文）：

東アジア海域世界の10 - 19世紀という長期的な歴史の時間において文献資料を用いどのように分析することが可能かという方法論について研究成果を積み重ねてきた。その結果、到達したのは次の三点である。(1) 文献資料、非文献資料の垣根を超え、新たな文献資料学の方法論を構築した。(2) 文献資料学においても社会学、人類学が用いるフィールドワークの方法論である参与観察の方法論を取り入れ、その史資料群を多角的な角度から分析する方法論を構築した。(3) 文献資料を用いて如何に、世界史の課題へ接近しうるのかと、外交史料、留学僧・外交使節の日記などの新たな活用方法を構築した。

## 研究成果の概要（英文）：

We have been researching different analytical methodologies of philological sources written during the long history between 10<sup>th</sup> to 19<sup>th</sup> centuries in the East Asia region. The following are the results of my research; 1) we established a new methodology in the philological sources study field that goes beyond the barriers between conventional philological sources and non-philological sources. 2) We adapted the participatory observation method, which is a fieldwork methodology often used in the sociology and anthropology, in the philological source study. Using this methodology, we established a methodology to analyze these groups of historical materials from diverse perspectives. 3) We established new ways of utilizing diplomatic documents, diaries of diplomatic missions to analyze how and how far we could examine issues of the world history.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,300,000	0	2,300,000
2006年度	2,300,000	0	2,300,000
2007年度	2,300,000	0	2,300,000
2008年度	2,300,000	0	2,300,000
2009年度	2,300,000	0	2,300,000
総計	11,500,000	0	11,500,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：文献資料学、非文献資料、参与観察、動態分析、世界史

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、かつて文書システム研究及び文献資料研究に於いて科学研究費補助金を受けている。

前者については「日記、時政記史料から見た宋代政治構造」(科学研究費補助金基盤研究C、平成12-14年度、310万円)を受け、宋代の宰相・執政が書いた公的日記「時政記」と私的日記とを通して、宋代特有の「対」及び「御筆」といった政治システムがどのように具体的な政治過程で用いられるかを分析した。とりわけ、長期的な政治構造分析を行う上で時政記或いは日記という新たな史料を見いだしたのは大きな成果であった。

後者については岡元司代表「宋代以降の中国における集団とコミュニケーション」(科学研究費補助金基盤研究B、平成14-17年度、1190万円)の資金援助を受け、日記、墓誌といった従来余り使われていない私撰史料を通じて政治的ネットワークを解析する試みを行った。墓誌に着目した成果については「從劉摯<忠肅集>墓誌銘看元祐党人之關係」(“宋代墓誌銘史料的文本分析與実証運用”国際会議、於台湾東吳大学歴史学系、2003年10月)にて報告を行い、既にその成果は台湾の『東吳歴史学報』第11号に掲載

された。また翌2004年8月にはモスクワで開催された第37回 The International Congress of Asian and North African Studies(通称ICANAS)にて、“The political sphere in the Southern Song “temporary capital of Hang-zhou”: An analysis of diaries written By Zhou Bida 周必大”という、日記を手掛かりとした政治的ネットワークの報告を行った。さらに12月に台湾で開かれた第18回 The International Association of Historians of Asia(通称IAH)においても、この内容を発展させた報告を行った。この共同研究を通じ、今回名前を挙げている海外の研究協力者との共同研究を進める機会が開かれ、以後継続的に共同研究が進められている。

この他、鹿島学術振興財団助成金「中国宋代に関する現存史料の活用方法についての研究」(代表：東京大学人文社会系研究科・小島毅、平成11-12年度、800万円)、三菱財団助成金「宋代文献資料解析方法の研究」(代表：小島毅、平成11-12年度、300万円)の助成金を得ている。これらの助成により、2000年モントリオールで開催された第36回ICANASへの参加、およびハーバード大学・カ

リフォルニア大学ロサンゼルス校でのシンポジウムの開催をおこなった。この共同研究の成果は、“How to analyse political material: a preliminary survey” (The Study of Song History from the Perspective of Historical Materials, p108-p128, 2000年)、「日本の宋代史研究の新しい視点」(『人文研究』52-2、35-54頁、2000年)、「政治の舞台裏を読む 宋代政治史研究序説」(『知識人の諸相 中国宋代を起点として』勉誠出版、31-49頁、2001年)という形で、新しい政治史分析法を提起する一連の研究成果と結びついている。

これら一連の研究活動については連携研究者の浅見洋二、遠藤隆俊、須江隆が参加しており、この時点より、既に文献資料学の新たな方法論を探る取り組みを共同研究という形で進めている。

## 2. 研究の目的

文献資料研究部門は、12の計画研究より構成されるが、本調整班は、これら複数の計画研究が個別分散的にならないように、総括班と密に連絡を取り合い、評価委員会に指導・助言を仰ぎながら、研究成果総合化のための重要な任務を担うことを目的としている。

本調整班の主たる具体的役割は、次の二つである。政治、文学、思想、法律、宗族、数学、医学など多分野の研究者が、文献資料論について討議を重ねる場を設定する。世界的に高水準にある我が国の伝統的文献資料学の手法を批判的に継承しつつ、欧米等の斬新な方法論を導入した資料分析の成果を視野に入れ、東アジア海域世界という、長期且つ広域の世界構造を明らかにする、独自の新しい文献資料学の創生を目指していくことである。

## 3. 研究の方法

研究代表者および連携研究者が集まる研

究集会を年3回開催する。ここで各研究班の研究進捗状況を確認するとともに、研究課題の相互調整を行って、それぞれの課題が有機的に連動するよう最終的な調整を行う。年度末には「文献資料学の新たな可能性」を共通テーマとしたシンポジウムを開催し、文献資料学研究の方法論、新資料の有効性について検討を行う。これらの成果については逐次、学術雑誌に公開し、最終年度においては当該課題の総括を行う。

## 4. 研究成果

(1) 刊行物(シンポジウム、研究集会の予稿集を除く)

『大阪市立大学東洋史論叢』別冊特集号「文献資料学の新たな可能性」(2006/5発行)

『大阪市立大学東洋史論叢』別冊特集号「文献資料学の新たな可能性2」(2007/6発行)

『大阪市立大学東洋史論叢』別冊特集号「文献資料学の新たな可能性3」(発行2007/12)

(2) 研究成果の総括

本文献資料研究部門は、三つの課題を設定し、取り組みを行った。第一の課題は、資料の発掘、開拓である。従来、文献資料学といえば、国家、官府などより発行される公的文書や手紙などに代表される私人間でやりとりされる私的文書、個人的な日記や備忘録、書籍、新聞、雑誌など文字によって伝達あるいは記録された資料を対象とし、考察を行う学問であった。その後、研究対象は、紙媒体にとどまらず、木簡・竹簡・金石文・甲骨文など紙以外に書かれた文献資料、並びに金属器、土器などに記された断片的な文字資料にも広がっていく。

本研究部門では、このような「非文献資料」の史資料をも視野に入れつつ、各研究班において新たな資料の発掘、開拓に努めた。具体的な成果は各研究班の総括に譲るとして、従

来の文献資料に加えて、外交文書、官箴、地方志、日記、石刻資料、詩文、医学書、数学書などの多様な資料を分析の対象とし、また、その資料そのものを分析対象とすると共に、資料が作成され、流布し、読まれ、受容されていく過程において、どのように記憶され、認識されていくのかという問題を同時に取り扱うことによって、文献資料、非文献資料の垣根を超え、新たな文献資料学を構築していくことを目指していった。

第二は、文献資料を如何に分析するかという研究方法の開拓である。まず、あげるべきが「参与観察」という方法論である。全体を統一する総括班「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成 寧波を焦点とする学際的創生」の元には、文献資料研究部門、現地調査研究部門、文化交流研究部門3つの部門が設けられている。そのうち、現地調査研究部門は主としてフィールドワークの参与観察という方法論を用いている。文献資料研究部門は、あくまでも史資料を読むことを旨としており、上記のようなフィールドワークを主として行うものではない。しかし、その分析においてはできる限り当時の社会を自然な形で叙述している史資料をできる限り入手し、その史資料群を多角的な角度から分析することが不可欠となる。本研究部門においても、参与観察に資する個人の日記、書簡や裁判記録などを分析対象としており、これらの資料と従来の文献資料学に用いられてきた資料とを突き合わせ検討することにより、社会の実態を解明することを目指した。

このほか、ハーバード大学のP.ボル教授、オックスフォード大学のヒルデ教授、復旦大学の呉松弟教授等を招聘してワークショップを開催し、近年欧米を中心に盛んになりつつあるCHGIS(中国歴史地理情報システム項目)、CBDS(中国歴代人人物資料庫)といったデータ

ベースを駆使して行う分析方法を学ぶ機会を設けた。文献資料を地理的空間分析やネットワーク分析にかけることにより、その文献資料の背後にある社会構造や人間関係を深く読み取ることが可能性となるのである。

第三の課題は、文献資料を用いて如何に、どこまで一國史の枠内にとどまらず、世界史の課題へ接近しうるかと、その可能性の追求である。本プロジェクトは「東アジア海域世界の交流」、「伝統日本文化の形成」を共通課題としており、世界史的な観点からの文献資料の分析が進められた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計18件)

平田 茂樹、「宋代文書制度研究の一個嘗試 以「關」、「牒」、「諮報」為線索」、『漢学研究』27-2, pp. 43-65、2009年、査読有り

浅見 洋二、「校勘から生成論へ--宋代の詩文集注釋、特に蘇黃詩注における眞蹟・石刻の活用をめぐる」、『東洋史研究』68-1, pp.34-69、2009年、査読有り

須江 隆、「宋代地誌序跋文考(2)乾道『四明圖經』の史料性に関する二、三の考察」、『人間科学研究』6, pp.163-138、2009年

平田 茂樹、「宋代的政治空間：皇帝與臣僚交流方式的變化」、『基調與變奏：7-20世紀的中國』、台湾・國立政治大學歷史學系他、pp.171-202、2008年、査読無し

須江 隆、「宋～清時代の紙に写された碑文--紹興府城隍廟に関する史料群を中心に」、『人間科学研究』5, pp.379-349 2008年、査読無し

平田 茂樹、「宋代の政治空間を如何に読むか?」、『大阪市立大学東洋史論叢 別冊 特集号 文献資料学の新たな可能性

3』, pp.219-243、2007年、査読無し

平田 茂樹、「宋代地方政治管見-- 笥子、帖、牒、申状を手掛かりとして」、『東北大学東洋史論集』11, pp.207-230、2007年、査読無し

遠藤 隆俊、「墳寺から祠堂へ-- 宋元士大夫の墳墓と祖先祭祀」、東北大学東洋史論集11、pp.55~82、2007年、査読無し

平田 茂樹、「解説宋代的政治空間」、『中日学者論中国城市古代社会』、中国・三秦出版社、pp.107-127、2007年、査読無し

平田 茂樹、「宋代の列女顕彰の構造-- 『宋史』列女伝を手掛かりとして」、『アジア遊学』91、pp.104-114、2006年、査読無し

須江 隆、「碑記に刻まれた反乱の風説-- 方臘伝説の成立と拡大」、『アジア遊学』91(特集 碑石は語る)、pp.36-49、2006年、査読無し

平田 茂樹、「従小説史料看宋代科挙社会的結合」、『科挙制的終結と科挙学的興起』、中国・華中師範大学出版社、pp.347-354、2006年、査読無し

平田 茂樹、「日本宋代政治研究の現状と課題」、『史学月刊』(中国、河南大学)308、pp.95-102、2006年、査読有り

平田 茂樹、「宋代の日記史料から見た政治構造」、『宋代社会の空間とコミュニケーション』、汲古書院、pp.29-67、2006年、査読無し

平田 茂樹、「『欧陽修私記』から見た宋代の政治構造」、『大阪市立大学東洋史論叢』別冊特集号、pp.95-110、2006年、査読無し

遠藤 隆俊、「成尋と義天 - 11世紀東アジアの国際環境と入宋僧 - 」、『大阪市立大学東洋史論叢』別冊 pp.45-60、2006年、査読無し

平田 茂樹、「宋代政治構造研究所説」、『人文研究』57、pp.243-256、2006年、査読有り

平田 茂樹、「政治史料から読み解く宋代の都市空間」、『アジア遊学』78、勉誠出版 pp.85-103、2005年、査読無し

〔学会発表〕(計5件)

平田 茂樹、「日本宋代政治史研究之新可能性 与国家史、国制史研究的嘗試性対話」、新政治史研究的展望研討会、台湾・中央研究院歴史語言研究所、2009年8月26日

須江 隆、「記録された言説と信仰 - 寧波の地方志と碑文を中心に - 」、国際シンポジウム「寧波とその周辺 地方文献に見える史料性・地域性・歴史性」、東京大学、2009年1月10日

平田 茂樹、「如何解説宋代的政治空間」、「唐宋時期的文書伝通与信息溝通」国際学術工作坊(中国・北京大学)、2007年9月28日

平田 茂樹、「宋代の列女顕彰の構造 『宋史』列女伝を手掛かりとして」、韓国・中国史学会、2007年9月9日

遠藤 隆俊、「宋代の宗族と移住伝説」、国際研究シンポジウム「中国の系譜と伝説」、大阪市立大学、2006年7月8日

〔図書〕(計4件)

平田 茂樹・遠藤 隆俊・岡 元司共編『宋代社会的空間と交流』、中国・河南大学出版社、375頁、2009年

浅見 洋二『中国の詩学認識：中世から近世への転換』、創文社、708頁、2008年

須江 隆主編『アジア遊学』91(碑石は語る)、勉誠出版、190頁、2006年

平田 茂樹・遠藤 隆俊・岡 元司共編『宋代社会的空間とコミュニケーション』、汲古書院、410頁、2006年

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

平田 茂樹 (HIRATA SHIGEKI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：90228784

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

浅見 洋二 (ASAMI YOJI)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70184158

青木 敦 (AOKI ATSUSHI)

大阪大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：90272492

須江 隆 (SUE TAKASHI)

日本大学・生物資源学部・教授

研究者番号：90297797

遠藤 隆俊 (ENDO TAKATOSHI)

高知大学・教育学部・教授

研究者番号：00261561

【海外研究協力者】

鄧 小南 (DENG XIAONAN)

北京大学・中国古代史研究中心・教授

劉 靜貞 (LIU JINGZHEN)

台湾・成功大学・歴史系・教授

廖 咸惠 (LIAO XIANHUI)

台湾・暨南大学・歴史系・副教授

Beverly Bossler

UCデービス大学・歴史系・教授